

韓国語の限定詞について

—日本語との対照—

趙 愛淑

キーワード：限定詞、とりたて詞、構文論的機能、とりたて機能、フォーカス

0. はじめに

韓国語には、構文的な機能を持たず、主に文中の要素をとりたてて、他との関係を示す機能をもつ形態素がある。

- (1) 철수 {도/ 만/ 까지/ 조차/ 는} 밥을 먹었다. 《太郎 {も/ だけ/ まで/ さえ/ は} ご飯を食べた。》
- (2) 철수가 밥 {도/ 만/ 까지/ 조차/ 은} 먹었다. 《太郎がご飯 {も/ だけ/ まで/ さえ/ は} 食べた。》
- (3) 철수가 밥을 먹기 {도/ 만/ 까지/ 조차/ 는} 했다. 《太郎がご飯を食べ {も/ *だけ/ まで/ さえ/ は} した。》

上記の「도、만、까지、조차、는」などはその分布が固定しておらず、(1)から(3)で示したように、主語、目的語の位置や述語句など様々な位置に現れる。これらの語は、特殊助詞、限定詞²などと称されており、これに対応する日本語は取り立て助詞、とりたて詞³とされている。

本稿の目的は、韓国語の限定詞の持つ構文論的・意味論的な特徴について、日本語のとりたて詞と比較対照することである。その議論は、以下のように展開する。1 節では、両言語における「とりたて」研究の概観を述べる。2 節では、とりたて詞、及び限定詞（以下、とりたて詞（限定詞）と表記する）の範囲を考える。3,4 節では、両言語のとりたて詞（限定詞）の持つ構文論的特徴と意味論的な特徴について考察する。5 節はまとめである。

1. 日韓語の「とりたて」研究の概観

1.1. 「とりたて」論の概観

日本語の文法研究における「とりたて」の研究には、構文論的な立場によった「とりたて詞」論と意味論的な立場による「とりたて」論とがある⁴。これらは、従来の語の形態に重点を置き、格助詞との承接の仕方や文構成上の機能によって、そのカテゴリーを副助詞・係助詞と二分してきた研究に対して、個々の形態の持つ意味や構文的な機能に着目し分析を行おうとする立場をとる。

沼田(1986)は、「とりたて詞」を肯定・否定といった論理的な意味を表すものと捉え、次のように定義している。

- (4) 沼田(1986:108)：とりたて詞とは、文中の様々な要素—これを自者と呼ぶことにする—をとりたて、これに対する他の要素—これを他者と呼ぶことにする—との論理的な関係を示す語である。

一方、寺村(1981)、益岡(1990)は、「とりたて」を、モダリティーと位置づけ、次のように記述している。その品詞論的なカテゴリーについては「取り立て助詞」と称している。

- (5) 寺村(1981:55)：コトを描くに当たって、あるいは描き上げつつ、その付着する構文要素を際立たせ、そのことによって自分のコトに対する見方を相手に示そうとするところにある。「際立たせる」ということは、それを受け取る聞き手の心のなかに喚び起こされる、何らかのほかのモノあるいはコトと「対比させる」ということにほかならない。

- (6) 益岡(1990:5)：ある命題を範列的に対立する他の命題を背景として取り立てること。

これらの定義は、具体的には、沼田(1986)では構文的な側面を重視したとりたて詞の概念の規定であるのに対して、寺村(1981)や益岡(1990)ではとりたての機能や性格の規定なので、両者の性格は必ずしも一致しないが、「とりたて」に対する三者の捉え方は次のようにまとめられる。

- (7) a. 共通点：とりたてを、意味論的な特徴に着目し、取り立てる要素と対比される要素との関係で捉えていること。
b. 相違点：品詞論的な側面、及び論理的な関係を示す「客観的」要素であるかモダリティーを表す「主観的」要素であるかという捉え方。

1.2. 「限定詞」論の概観

韓国語の限定詞については、前接要素に意味を加える（あるいは限定する）意味機能語

として記述されるのが一般的である。(以下、括弧には品詞論的カテゴリーを示し、拙訳。)

- (8) 崔鉉培(1937:636)：観念詞の後ろにつけて、それらに文の成分としての一定した格を与えるのではなく、ただその成分の意味を補助する役割をする助詞である。(도움토씨：補助詞)
- (9) 金英熙(1974:301)：文法機能語でなく先行語の意味限定語。(限定詞)
- (10) 蔡琬(1977:1)：現代国語の助詞は格を表す格助詞と意味を加える限定詞とに分けられる。(特殊助詞)

形態論的な観点からの限定詞論に関する議論は、限定詞とされる語の設定(2節で論じる)とその品詞論的カテゴリーの問題の二つに分けられる。

品詞論的カテゴリーについては、「助詞か否か」⁵によって、「特殊助詞」「補助詞」と「後置詞」「限定詞」との対立が見られる。まず、助詞とする観点から、「도움토씨：補助詞」は「特殊助詞」の別名として主にハングルを専用する立場で使われている。当初、「特殊助詞」という名称は、「様々な格に使われる助詞」(李熙昇(1949:52))として使用され始めたが、現在は「格機能を持たない」とする見解が一般的である。また、助詞と捉えない観点から、「限定詞(delimiter)」は生成文法を基盤とする立場、「後置詞(postposition)」は、分布は異なるが、欧米語の前置詞と同様の機能を持つとする立場である。しかし、後置詞とされる語には、格助詞、依存名詞(高暢洙(1987))も含まれており、現代韓国語における限定詞の特性を表すのに、その名称は適切でないと思われる。これらの用語の中で、「特殊助詞」「限定詞」「補助詞」が一般的に使われているが、それぞれ研究者間の観点、立場による相違があり、見解が一致しているわけではない。ただし、限定詞を主に格助詞と比較し、文法的な関係でなく一定の意味を加えるものと捉えている点では共通している。これは、宮地(1952:27)が日本語の副助詞の働きを「何らかの意味を添へる」と捉えた点と通じるところがある。

以上のような韓国語の限定詞に関する品詞論的な捉え方の相異は、それぞれのアプローチの相違による主張と理解するならば、日本語の場合と似通うところがあるように思われる。

1.3.両言語における議論点と本発表の立場

日韓両言語における「限定詞」及び「とりたて詞」などは、その品詞論的な位置づけが統一されていない点において同様の問題点をかかえる。本稿では、品詞論的な議論やそれ

に伴うカテゴリーの名称の問題には深入りせず、先行研究に従い、「とりたて詞」「限定詞」と称する。その理由は、従来の品詞論の枠組みから助詞として下位分類する場合、依存形態である点では一致するものの、他の助詞類が文中での他の語との関係を示す、横の関係(syntagmatic relation)を表すものであるのに対して、とりたて詞、限定詞は文外に暗示される他の要素との関係を示す、縦の関係(paradigmatic relation)を表すもので、他の助詞類とはその性格が異なるからである。また、品詞論的分類の仕方はそれぞれの研究者の立場によるもので、どの品詞に属するとしても、これらの語が「とりたて」機能をする点で対応している。従って、機能の面からとりたて詞、限定詞は等価(equivalence)の形式と行うことができる。そこで、「とりたて」を次のような機能として捉え(趙(1997)参照)、限定詞にも同様に当てはまることと考えていく。

- (11) その文脈で取り上げられているカテゴリーにおいて、明示されている要素と範疇的な関係(paradigmatic relation)の中で暗示される他の要素とを対比あるいは関係づける機能。

2. とりたて詞(限定詞)の範囲

2.1. とりたて詞(限定詞)の目録

周知のように、韓国語は語尾や助詞、接尾辞などの依存形式が発達している。とりわけ、限定詞は形態的には非自立形式であるにもかかわらず、意味的には副詞のような働きをしており、カテゴリーの設定から問題点が指摘されている。また、限定詞は他の依存形式ともその性格が類似しているため、限定詞の語の設定に研究者の間で差が見られる。

ここで、限定詞に関して議論を行っている代表的な11人の研究者達が共通に取り上げている語をまとめ⁶、それに関する本稿の立場を述べることにする。

- (12) 11人の研究者間で共通して取り上げている限定詞⁷

	人数	語数	限定詞	
a	11人	9個	는(は)、도(も)、만(だけ、ばかり)、조차(まで、さえ)、까지(まで)、마저(さえ、まで)、(이)야(は)、(이)라도(でも)、(이)나마(でも)	一致
b	10人	2個	부터(から)、(이)나(も)	不一致
c	9人	1個	뿐(だけ、ばかり)	
d	8人	3個	(이)ㄴ들(でも)、(이)야말로(こそ)	
e	.			

図(12)で見られるように、(12a)は研究者間の見解が一致するものの、(12b)以降は研究者

間の見解が一致するわけではない。そこで、(12)に関する限定詞の有無について考える。

まず、(12a)は限定詞と見なす。ただし、同形でも限定詞以外の構文的機能を持つ場合も見られ、より詳細な検討の余地があると思われる⁸。また、(12b)以降の形態については、まず、「부터」は、蔡琬(1995)では処格助詞とされるがその根拠は明示されていない。反面、최동주(1997)、최형용(1997)では、格助詞、用言の語尾にも後接するとし、限定詞と捉えている。しかし、「부터」は、主に時間語、空間語、その他の一般名詞に後接され、移動の起点、時の起点などを表す。分布的には、副詞の後には現れず、用言の語尾の後に現れる場合は限定詞とは考えない⁹。また、최동주(1997)、최형용(1997)等が格助詞に後接するとする「-에서부터(からから)」、「-로부터(でから)」の例は、あたかも格助詞「-에서」「-로」に「부터」が後接したように見えるが、これらは「부터」の異形態である可能性¹⁰もあり、今のところ「부터」は格助詞と考えたい。

さらに、蔡琬(1993)では、「(이)나」は、限定詞、接続助詞、繫辞の活用形という三つに分類し、「(이)들」は繫辞の活用形と分析されており、本稿もそれに従う。一方、「(이)야말로」は、用言の語尾の後に現れにくいという制約はあるものの、格助詞と副助語に後接する点や意味的な機能から限定詞と考えられる。

最後に、「뿐」であるが、これは以前から限定詞であるか形式名詞であるかということが議論されてきたものである。例えば、蔡琬(1995)では、「뿐」を形式名詞として捉え、その根拠として、①一定の構造(「~뿐이다/아니다」)をなすこと、②「-에서」以外の格助詞に後接できないこと、③後ろに格助詞が表れないこと、④体言・連体語の修飾を受ける位置に表れることという四つの分布的な特性をあげている。

(13) a. 그 얘기가 우리를 웃겼을 뿐 아니라, 행복하게 했다. (lady11月号)《その話が我々を笑わせただけでなく、幸せにさせた。》

b. 또한 스위스 은행 계좌는 정말 존재하는지, 그 계좌에 돈이 실제 유입되어 들어갔는지에 대해 수사하면 그 뿐이다. (Han981022)《また、スイス銀行の口座が実際に存在するのか、その口座にお金が実際に流入されたのかについて捜査すればそれだけである。》

(13)のように述語の連体形、連体語に後接する「뿐」は形式名詞と考えられる。しかし、「-에서」以外の格助詞にも後接すること((14)から、ここでは(14)の「뿐」は限定詞と捉え、「뿐」を形式名詞と限定詞に分けたい。

(14) a. 그런 마음은 아버지에게 뿐 아니라 자식들에게도 마찬가지 였다. (女2:229)《そのような母の気持ちは父に対してだけでなく、子供たちに対しても同じだった。》

- b. 그는 딸로부터 뿐만 아니라 조강지처로부터 자유로와 졌다는 기쁨을 미처 간수하지 못하고 있었다. (結婚:97) 《彼は娘からだけでなく妻からも自由になったという喜びを押さえきれなかった。》
- c. 이러한 배경에서 백포는 무장독립투쟁의 지도자로서 뿐만 아니라 한국 종교철학사에도 커다란 발자취를 남겼다. (Win 42 号 981101)このような背景で白布は武装独立闘争の指導者としてだけでなく韓国の宗教哲学史にも大きな業績を残した。》

以上のことから、(12)のなかで、以下の 12 語を限定詞と捉えることにする¹¹。

(15) 는, 도, 만, 조차, 까지, 마저, (이)야, (이)라도, (이)나마, (이)나, 뿐, (이)야말로

一方、日本語のとりたて詞について、寺村(1981)、沼田(1986,1991)は、やや文語的、会話的な表現に現れるものを除き、ほぼ共通の 16 形態を挙げており¹²、本稿でもこれらの語をとりたて詞と見なす。

(16) ばかり、まで、など、なんか、なんて、だけ、のみ、くらい、は、も、こそ、さえ、すら、でも、しか、だって

2.2.他の品詞との関係

日本語の場合、沼田(1986)のとりたて詞の議論は、従来の形態論的な観点を離れ、それぞれの形態がもつ意味や構文論的な機能の観点から現象を分析しようとする点が新しい。同形の異なる構文的機能を認める立場は、宮地(1952:30)、寺村(1981:57)にも見られるが、それをより客観的な基準をもって精密に分類したのが奥津(1974)、沼田(1986)である。

奥津(1974)は、主に「連体修飾文の被修飾名詞となるか」というテストによって品詞論的分類を行っている。すなわち、同形態でも構文論的な機能が異なる語にはその機能の分化を認め、他のカテゴリーに再分類する。例えば、奥津(1974)は、副助詞とされてきた「ばかり」を、次のように分けている。

- (17) a. このごろ雨ばかり降っている。(とりたて詞)
 b. 十ばかり留守にします。(不定数量限定詞あるいは形式名詞)
 c. 彼女はまぶしいばかりに美しかった。(形式副詞)

一方、沼田(1986)では、構文論的な機能の他に、意味の違いに応じて、例えば、「さえ」に関して「意外」の「さえ」((18a))、「最低限」の「さえ」((18b))のような分け方をする。

- (18) a. 市吉さんの住む飯塚市の職員には、女性課長さえ一人もいない。(朝日 971116)

b. 衛星さえ上げれば他国の様子が手に取るようにわかる、と思うのも単純すぎる。

(朝日 981107)

このような捉え方は韓国語の限定詞においても適用されるとされる。すなわち、形態を意味的な機能によって複数に分けて分析し、同時に、構文的な機能によって限定詞かそうでないかを見る、ことができる。例えば、「만」は、意味的に「限定」と「最低条件」の二つに分けられる。

(19) 남에 대한 이해나 우에 대신에 가답없는 시샘과 미움과 잔학성만이 판을 치게 된 세상 《人に対する理解や友愛の代わりに、わけのない妬みや憎しみや残酷さばかりが大手をふるうようになった世の中》(自由:156)

(20) a. 불만 불이면 금시 터질 하나의 폭발물. 《火{さえ/だけ}つければすぐ破裂する一つの爆発物》(玄海:80)

b. 불만 불이다. 《火だけつける。》

c. *불만이 불이면 금시 터질 하나의 폭발물. 《*火{さえ/だけ}가つければすぐ破裂する一つの爆発物》

(19)は、世の中の間人間関係というカテゴリーについて「他人への理解や友愛」と、「妬みと憎しみと残酷さ」が文脈から対比され、「世の中にあるのは妬みと憎しみと残酷さに限る」という限定の意味をなす。(20)は、爆発物が破裂するためには「火をつける」ことのみで「火をつける以外」のことは必要がない、という最低条件の意味となる。

構文的な特徴に注目すると、(20)の「만」は条件文中にあり、それを平叙文にした(20b)の意味は(19)と同様に「限定」となる。また、格助詞「-가」に前接できるのは、(19)の限定の「만」に限られる。これに着目すると、(19)、(20)はそれぞれ「만 1」と「만 2」に分けられる。

一方、次の例の「만」は、限定詞から排除される。

(21) a. 요즘 오랜만에 TV에서 보는 것 간단 말을, 《この頃久しぶりにTVで見るよ
うだという言葉。》(lady 98-10月号)

b. 하루만에 왔다. 《一日ぶりに来た》(金勝坤 (1996:332)引用)

(22) a. 이 정도의 크기면 한 식구가 살 만 하다. 《このぐらいの広さなら一家族が生活できるほどである。》

b. 손바닥만 한 시골장터에서 난전꾼의 물건을 탈취해가는 사례는 드문 일이었다. 《手の平ぐらいの田舎の市場で露天商人の品物が盗まれることは珍しいことだった。》(アリ 980401)

c. 짐승만도 못한 인간 《獸より劣る人間》

(21)(22)の「만」は、それぞれ時間の経過、程度の意味を表している。すなわち、(21)の「만」は、構文的にその前に助詞が現れることはなく、前接語が時間表現、後接語が助詞

「-에」という「時間表現+만+-에」の構造で形式化されて、全体的に副詞的な働きをしている。一方、(22)は、(22a)が「述語連体形「-ㄴ」+만+하다」という構造を、(22b,c)が「名詞+만+하다/못 하다」の構造をなす形式名詞と考えられる¹³。

また、従来の限定詞とされた語の中で、「(이)라도、(이)나마、(이)야」と「(이)나、(이)야말로、(이)ㄴ들、(이)든지、(이)라면、(이)ㄴ즉」など、形態上閉音節である体言に後接する場合、音韻的に「-이」という母音を媒介する共通性がある。前者は従来、限定詞として認められているものであるが、後者は意見の一致が見られず、限定詞か繫辞の活用形かについて議論の余地がある。

蔡琬(1993)は、①「X+(이)라도…(이)야…」の構造の「NP-가 X-이다(NPがXである)」構文への転換の有無、②「-이」の後に過去テンスの語尾「-았-」の介在の有無、③開音節で終わる名詞後の「-이」の脱落の有無という三つを基準とし、「(이)나、(이)ㄴ들、(이)라면、(이)든지、(이)야말로」の五つの形態¹⁴を分析した結果、「(이)나、(이)야말로」のみを限定詞とする。また、その機能によって、同じ形態を複数のカテゴリーに分けており、このような構文的機能による同形の品詞論的分類の立場はとりたて詞と並行している。例えば、「(이)나」について、

- (23) a. 밥하기 싫은데 빵이나 먹자. 《ご飯を炊きたくないから、パンでも食べよう》
(限定詞)
b. 산이나 들이나 모두 초만원이다. 《山とか野とかみんな超満員だ》(接続助詞)
c. 남편은 시인이나 아내는 소설가이다. 《旦那な詩人であるが、奥さんは小説家である》
(繫辞「-이」+接続語尾「-(으)나」)
d. 남편은 갔으나 아내는 가지 않았다. 《旦那は帰ったが、奥さんは帰らなかった》
(語尾「-(으)나」)

に分けている。このような(23)の「나」は、それぞれ意味上の関連性を持たない点、構文上の機能が異なる点でお互いに別のカテゴリーに属する要素として捉えられる。

以上のような、一つの形態が多品詞語、あるいは異義語のような振る舞いをするこの原因について、語源的な問題を含め、様々な要因があると思われるが、本稿では通時的な研究などまでは立ち入らないことにする。

3. 構文論的特徴の対照

3.1. 分布の仕方

構文論的な観点から見ると、日韓語のとりたて詞(限定詞)は、文中の様々な構成要素に後接するという共通点を持ち、このことは両言語の文法研究において、それぞれ次のよ

うな指摘がなされている。(点線は筆者による)

- (24) 寺村(1981:62): その付く語の種類が多様だということであろう。文を構成する要素の継ぎ目のあちこちに付く。
- (25) 沼田(1986:111): とりたて詞は文中での分布が非常に自由であり、この特徴は格助詞や並列詞、文末詞などのように、分布が決まっているものにはない特徴である。
- (26) 崔鉉培(1937:636): 월의 입자말에도 붙을 수가 있고, 부림말에도 붙을 수가 있고, 매김말에도 붙을 수가 있으며, 또 어찌말뒤에도 붙느니라. 《文の主語のほか、目的語、連体語、副詞語にも後接できる。》
- (27) 任洪彬・李翊燮(1983:162): 명사 뒤에뿐만 아니라 부사나 몇몇 활용형 뒤, 심지어는 ‘하다’ 앞의 어근 뒤에조차 연결된다. 《名詞ばかりでなく、副詞、いくつかの活用形の後、さらに、「する」前の語根の後にまで現れる。》

すなわち、文中で現れる位置が固定されていないという分布の仕方は、日韓両言語におけるとりたて詞(限定詞)の大きな特徴と言えよう。以下、いくつかの例を挙げる。(Tはとりたて詞(限定詞)を指す)

- (28) a. 冗談まで類型化する。(天声 980401) (名詞+T)
b. 농담까지 정형화 한다.
- (29) a. 버스で だけ行ける。 (名詞+格助詞+T)
b. 버스로만 갈 수 있다.
- (30) a. 私は 君だけを愛している。 (名詞+T+格助詞)
b. 나는 너만을 사랑한다.
- (31) a. 「ハイ」といいさえすれば、私はこの悶々としたどこまで続くかわからない長いトンネルから脱けられるのだ。(女が:77) (述語の活用形+T)
b. 「네」라고 대답하기만 하면, (略).
- (32) a. あれはどうしていつもチラッとしか見せないのかしら、と純子は考えた。(女社:418) (副詞+T)
b. 저것은 어째서 언제나 슬쩍밖에¹⁵보여주지않는 걸까,라고 순자는 생각했다.
- (33) a. すべての生き物に愛情を抱いていたからこそ、多くの木をよみがえらせることができた。(天声 970928) (従属節+T)
b. 모든 생물에 애정을 품고 있었기 때문에야말로, 많은 나무를 재생 시킬 수가 있었다.

(28)から(33)に見られるような前接する成分の多様性は、両言語の中で、それがとりたて詞(限定詞)であるか否かを弁別する基準の一つであるといえる。とりわけ韓国語においては、形式名詞や接尾辞類も名詞の後や格助詞の前に現れうるため、用言の活用形への後接の有無が決め手となっていると思われる(蔡琬(1995)、최형용(1997))。つまり、活用しない非自立形式としてこのような分布の振る舞いを見せるものは、助詞類を含めた他の力

テゴリーとは区別されるべきであることを示している。

しかし、とりたて詞に属する語全体に共通する分布の特徴を取り出すことは困難である。なぜなら、個々の形態の持つ分布的な現れ方はそれぞれ全て異なっているからである。し
いて言えば、とりたて詞が主語表示の「が」格の後には表れないことが指摘できるぐらい
であろう。このような現象は韓国語においても並行しており、限定詞全体を括れるような
分布的特徴を取り出すことは難しい。

3.2.構文的機能

とりたて詞（限定詞）の構文的特徴は、以下に示すように、それがなくても前接語の構
文における機能が変わらないことである。つまり、とりたて詞（限定詞）は、様々な文成
分に後接するが、それ自体は先行成分の文法機能とは関与しない。

- (34) a. まわりはビールを飲んでいる大人ばかりだ。こんなところをおとうさんにでも
見つかったら大変だ。(夏の:166) (連用修飾)
b. こんなところをおとうさんに ϕ 見つかったら大変だ。 (連用修飾)
- (35) a. 주위는 맥주를 마시는 어른들뿐이다. 이런 모습을 아버지한테라도 들키면
큰일이다. (連用修飾)
b. 아버지한테 ϕ 들키면 큰일이다. (連用修飾)

(34)(35)の「おとうさんに」「아버지한테」は「でも」や韓国語の「라도」が消去されても
述語「見つかる」「들키다」を修飾する連用成分であることに変わりはない。もちろん、「で
も」等のとりたて詞はそれ自体独立した意味を持っているため、「でも」、「라도」がある文
とない文とでは、その意味が異なる。しかし、構文的側面においては「でも」、「라도」を
加えることによって、前接する成分の構文的な機能の変化は起こらない。ここに着目する
と、とりたて詞（限定詞）は構文的な働きはしないものと考えられる。

このようなとりたて詞の消去可能性については沼田(1986)も指摘し、これを「任意性」
と称している。ただし、沼田(1986)は、文の基本構造との関わりから、とりたて詞とそれ
以外の要素を弁別するための基準として、「文の成立の有無」という観点で論じられたもの
である。沼田(1986)では、その他のとりたて詞の構文論的特徴として、「連体文内性」、「非
名詞性」が挙げられ¹⁶、上記の「分布の自由性」「任意性」とともに、とりたて詞と非とり
たて詞を弁別する基準にしている。

4. 意味論的特徴の対照

4.1. 「自者」「他者」

とりたてとは、(11)で示したように、「文中で明示されている要素と範列的な関係の中で暗示される他の要素（以下「自者」と「他者」と表す¹⁷⁾）とを対比あるいは関係づける機能」を指す。すなわち、ある文中にとりたて詞（限定詞）が加わると、その文の伝える事柄に対して述べながら、その文中には実際に表されていない、もう一つの意味を表すと同時に、両者の関係をも伝えていると言える。

- (36) a. 太郎が研究会に来た。
b. 철수가 연구회에 왔다.
(37) a. 太郎だけ研究会に来た。
b. 철수만 연구회에 왔다.
(38) a. 太郎も研究会に来た。
b. 철수도 연구회에 왔다.
(39) a. 太郎さえ研究会に来た。
b. 철수조차 연구회에 왔다.

例えば、上の例において、もし、「太郎」があるクラスの一員で、「太郎」と対比される要素が「クラスの他のメンバー」であれば、(37)から(39)のいずれの文も、(36)の文中に現れている事柄に対して述べると同時に、それぞれ次のような意味も伝える。

- (40) a. クラスの他のメンバーが研究会に来なかった。
b. 다른 학생들이 연구회에 오지 않았다.
(41) a. クラスの他のメンバーが研究会に来た。
b. 다른 학생들이 연구회에 왔다.
(42) a. 誰より来る可能性が低かった太郎が研究会に来た。
b. 누구보다도 올 가능성이 가장 적은 철수가 연구회에 왔다.

すなわち、それぞれのとりたて詞（限定詞）は、「自者」と「他者」とがどういう関係を示しているのかを表している。

このように「だけ」、「も」、「さえ」などは、とりたての働きを持つ点で共通するが、「さえ」「조차」では要素間に「来る」可能性の高い要素と低い要素間の序列が付与されるのに対し、「だけ」「만」と「も」「도」はこのような集合要素間の序列関係は示唆していない。このように、文の意味はそれぞれのとりたて詞の持つ意味によって異なってくる。

4.2. 他者とフォーカス

「他者」とは、自者と同類の要素（寺村の「影」（1986））であり、原則的に「暗示」さ

れるものとして、発話に参加する者同士の共有する一般的な常識、社会的通念、文脈などから理解されるものである。従って、自者の範囲であるフォーカス¹⁸は、文脈などの情報から決定され、必ずしも前接語のみをとりたてるものではないとされている。

また、自者と他者間の「同類性」については、「自者と他者にあたるコトガラ・デキゴトが言語生活・現実世界の中で同一線上に起こりうるということを支える「上位概念」の設定が可能か否かという語用論的な問題である」(趙(1998:42-43)と考えられ、他者が文脈に明示されていない場合には、フォーカスが明確でない場合も見られる。このことは、韓国語の限定詞の場合にも並行しており、限定詞の文中での位置から、フォーカスは一義には決められない。例えば、

(43) a. 철수가 소설책만 읽고, 신문은 읽지 않는다. 《太郎が小説だけ読んで、新聞は読まない。》

b. 철수가 소설책만 읽고, 공부는 하지 않는다. 《太郎が小説だけ読んで、勉強はしない。》

の「만」は、(43a,b)両方とも「소설책(小説)」に後接しているが、文脈によってはそれぞれ「소설책(小説)」、「공부를 하다(小説の本を読む)」がとりたてられている。

しかし、従来、限定詞のフォーカスに関しては、主に前接語や先行する要素に限られると捉え、他者を想定しにくい場合は、とりたて機能から排除する立場をとっている(成光秀(1978)、洪思満(1983)、金勝坤(1992)など)。例えば、

(44) 고물차가 빨리만 달린다. 《*中古車が速くだけ走る。》(成光秀(1978:185)引用)

の「만」は副詞「빨리(速く)」に後接しているが、意味的に「늦게(遅く)」などを他者と想定した「中古車が速く走るだけで、遅く走らない」という解釈にはならないことから、「強調」の機能であるとする。しかし、これを、本稿のように、文脈などでの他者との関係で決まるものとするれば、(44)の「빨리(速く)」は、「故障もなく」「騒音もなく」や、あるいは「速く走る」コト全体と「スピードを出せないと思ったのになつたり、発話以前は(速く走らない)と思った」コトなど、話し手の主観的判断と対比されるとりたてとして処理できる。すなわち、他者は、自者の持つ意味論的な次元のみならず、語用論的な次元での入れ替え可能な要素である。従って、限定詞がとりたてる要素は、とりたて詞と同様、前接要素に限られず、(43b)(44)を含め、以下のような後接する要素が含まれる場合がある。(以下、<>は自者、<<>は他者を示す。)

(45) 아로운한테 <얘기만 듣>구 <<가 본>> 적은 없습니다. 《阿魯雲から話だけ聞いて、行ったことはありません》(玄海 1:352)

(46) 국무회의 석상에서 느닷없이 내년부터 신정연휴를 이틀에서 하루로 줄인다는

애기가 나오자 곳곳에서 《불만이 터져나오고》 <혼선까지 빚어지고> 있다.
(東亜 981203) 《國務會議の席で急に来年から新年の連休を二日から一日に減らすという話が出るとあちらこちらから不満が続出し、混乱にまで至った。》

また、(47)のように、前接要素を飛び越えてその前の要素である「上流(層)」をとりたてる場合も見られる。そして、(43)から(47)の例からもわかるように、他者は必ずしも暗示されるものではない。

(47) 식용유는 《하류층》 집에는 없고 <상류층> 집에서만 구경할 수 있는 것입니다. 《サラダ油は下流層の家にはなく、上流層の家でだけ見ることのできる物です》

さらに、韓国語の限定詞の意味論的な側面に注目した研究では、姉妹項(sister member)¹⁹、前提(presupposition)、断言(assertion)、含意(implication)などの概念を用いているが、各研究者間に概念規定の相違が見られ²⁰、それぞれの概念の理論的な記述が明確に規定されていないように思われる。ただし、他者を「暗示」されるものとして捉えている点では日本語と共通している。

以上から、とりたて詞(限定詞)が意味的にとりたてる要素の範囲は、実際の文脈での他者との関係から理解され、他者が明示されない限り、とりたて詞(限定詞)の構文的な位置からは一義的には決められないことが明らかとなった。そこで、とりたてを、(11)での定義に加え、次のように改めて定義し直す。

(48) とりたてとは、その文脈での情報から得られるカテゴリー(上位概念)から想定される集合要素の中で、自者と範列的な関係(paradigmatic relation)にある要素を他者として想定し、両者を対比あるいは関係づける機能。

5. おわりに

日韓両言語における「とりたて」という現象に関する議論は、品詞論的カテゴリーの問題を含め、解決されていない多くの問題点を抱えている。特に、韓国語の場合は、限定詞の目録の設定や同形態でも機能による分類に関する議論など、十分に検討されているとは言にくい。それは、今までの研究の多くが、意味論的な観点に注目したものであり、構文論的観点からの研究が少なかったためであると思われる。

従って、本稿では、限定詞の持つ構文論的、意味論的な機能を次のようにまとめた。

まず、構文論的な機能は、従来、格助詞との対比という観点から格機能を持つか否かに焦点が当てられてきたのに対して、文の構造との観点からは、先行要素の構文的機能には関与しないことを論じた。すなわち、格助詞が述語との意味的な関係を示す、横の関係(syntagmatic relation)を表すものであるのに対して、限定詞はそれがとりたてる要素と対

比される他との関係を示す、縦の関係(paradigmatic relation)を表すものと捉えた。

また、意味論的な機能については、従来、限定詞は前接語や先行成分を限定するものとして捉えられたが、限定詞によってとりたてられる要素は前接語のみならず、後接する語も含まれること、また、前接語を飛び越えた前の要素である場合もあることを論じ、従って、その文のみではとりたてられる要素の範囲は一義には決められず、複数の可能性があり、実際に発話されはじめて明確にされることを述べた。

また、本稿で十分に議論出来なかった問題、例えば、限定詞の目録の設定、「助詞か否か」という品詞論的なカテゴリーの問題を含め、日韓両言語のとりたて詞(限定詞)の一つひとつの語が持つ構文論的、意味論的な機能に関する詳細な議論は次の機会に論じたい。

注

¹ 「-은/-는(は)」は音声的な環境による異形態を持つ。また、「-이/-가(が)」、「-을/-를(を)」、「-으로/-로(で)」などの格助詞も同様で、それぞれ前者は閉音節(子音)、後者は開音節(母音)の後につく場合である。本発表では、例文での表記を除いて、開音節で表記することにする。

² 他に、「補助詞」「後置詞」とも呼ばれており、詳しいことは1.2節で論じる。

³ これらの形態素は、従来、副助詞・係助詞とされた語で、両者を一つのカテゴリー化する理論的な根拠については、奥津(1974)、沼田(1986)に論じられている。本稿では、「とりたて詞」というカテゴリー設定に関する議論には深入りしない。

⁴ 本稿では、とりたての側面から副詞を論じた「限定副詞」(工藤浩 1977)、あるいは「序列副詞」(小林典子 1987)におけるとりたて論は考察対象から除外する。

⁵ 最近では、語を語彙的なものと文法的なものとの区別し、助詞と語尾のように文法的機能をする要素を品詞論的な枠組みから排除し、「토」という一つの文法形態として扱う立場(高永根(1993:25-27))も見られる。これは北朝鮮における韓国語の文法論と通じるところがある。

⁶ この設定について、①文法理論書:崔鉉培(1937)、南基心外(1985)、金錫得(1992)、徐正洙(1994)、許雄(1995)、②助詞の研究書:申昌淳(1975)、成光秀(1978)、③限定詞の研究書:洪思満(1983)、蔡琬(1977,1993,1995)、金勝坤(1989,1996)、李源根(1996)を参考にした。

⁷ 韓国語の形態に対応する日本語の訳は、代表的な訳語を示すにとどまった。例えば、「꿈에 너들 잊으리요, 그 잔잔한 고향바다.(夢でも忘れられないよ、その穏やかな故郷の海)」、「네가 나를 모르는데 나 너들 너를 알겠느냐.(君が私を分からないのに、私があなただを分かる筈がない)」のように、それぞれの文脈によって対応する日本語が異なり、日韓語におけるとりたて詞は1対1の対応関係は有していない。また、図において7人以下の研究者しか扱っていない語については割愛する。

⁸ 名詞に後接する場合の「까지」は、意味的に限界点(a)、意外(b)を表すが、意外を表す場合に限って限定詞と考える。また、両者はその文中で消去されるか否かで異なる構文的機能を持つ。

a. 학교에서 집까지 얼마나 걸립니까?《学校から家までどのぐらいかかりますか》

b. 원정대열에는 고고학·지리학·물리학자는 물론 토목·측량기사, 심지어 화가, 시인까지 끼었다. (京郷 981030)《遠征隊列には考古学、地理学、物理学者はもちろん土木、測量技者、甚だしくは画家、詩人まで含まれている》

これに関して、蔡琬(1977)、南基心外(1985)、徐正洙(1994)などでは同様の考え方が見られる。

⁹ 최동주(1997:214)は「그는 어려서부터 건강이 좋지 않았다.(彼は子供の頃から健康が良くなかった)」、최형용(1997:40)は「먹어부터(食べから)」、の例を挙げ、用言の活用形に後接できるとする。しかし、최형용(1997)の例は、実例は見つからなかった。もし、これが「먹어부터 보고 말해라(*食べてからみて言いなさい)」などの例を想定したもので、それが自然だとするのならば、「먹어보고 나서(먹어본 후) 말해라(食べてみてから(食べてみた後に)言いなさい)」という意味と思われる。また、최동주(1997)の「어려서부터」も、「어릴 때부터(子供の時から)」の意味として、「부터」は時の起点を表している。従って、用言の活用形の後につく「부터」はとりたてではなく、接続詞的な機能をするものとする。

¹⁰ 金勝坤(1996)は、「-로부터」を「부터」の異形態とする。また、徐正洙(1994:820-821)は、本来「-

에서부터」-로부터」での「-에서」「-로」が省略され、「부터」の形態で出現すると指摘している。

¹¹ (12e)以降の形態に関する議論の必要もあるが、本稿の中心的な問題からは外れるため、これについては別稿にゆずりたい。

¹² 沼田(1986)は、「のみ」「すら」を文体的な観点から、それぞれ「だけ」「さえ」と同様に扱っている。「のみ」については、寺村(1981)は議論していない。他、総記の「が」については、沼田(1991)、野田(1995)などではとりたて詞と認めている。

¹³ (21b,c)のように「만」が名詞に後接する場合、助詞とする見解もある(崔鉉培(1937)、李炳模(1995))。崔鉉培(1937:629)は「比較格助詞」、李炳模(1995:82)は「程度の助詞」とする。

¹⁴ これらの弁別基準は、崔鉉培(1937)にも見られ、他の形態にも適用されると思われる。また、蔡琬(1993)では、助詞と繫辞の弁別基準として、副詞語に後接有無を提示し、「언제가 문제가 아니라 어떻게 문제가 아니다.(いつが問題でなく、どうやってが問題だ)」の例を挙げ、副詞語に後接できるのは、助詞に限られるとする。しかし、「문제는 언제가 아니라 어떻게이다.(問題はいつではなくどうやってである)」「토종의 대추는 산지에 따라 색과 모양이 제각각이다.《土地産のナツメは産地によって色と形がまちまちである。》(アリ 981013)」のような例で見られるように、副詞語への後接の有無は助詞と語尾(繫辞「이다」の「이」など)の弁別基準にはならないと思われる。

¹⁵ 「밖에」は、限定詞あるいは「名詞「밖」+助詞「에」」の構造を持つものとされている。上記の(12)の設定からは、6人が限定詞として認めている。

¹⁶ それぞれの概念の定義は、沼田(1986)参照。

¹⁷ 沼田(1986)の用語で、本発表でも以下それに従う。

¹⁸ 沼田・徐(1995)の用語で、とりたてのフォーカスとは、「とりたてのスコープ内にある要素で、文脈等の語用論的情報から、他との範列的な対立関係を集約的に表す要素(つまり自者)、と捉えられる構成素の範囲」、一方、とりたてのスコープとは、「とりたて詞が文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域で、当該のとりたて詞によって、他と範列的な対立関係をなすと捉えられる、文中の範囲」(p.177)と定義されている。

¹⁹ Yang(1973)の用語で、本発表での他者に相当する。

²⁰ 例えば、「까지」の意味機能に対する分析として、次のようなものが挙げられる。

①高永根(1976:18)―「칠수까지 왔다.(太郎まで来た)」

- a. (前提) 太郎が来た。
- b. (断言) 他の人が来た(次郎が来て、三郎も来た)
- c. (含蓄) 話し手は太郎が来るとは期待しなかった。

②蔡琬(1977:44)―「영이까지 낙제를 했다.(花子まで落第をした)」

- a. (前提) 一花子以外に他の人が落第をした。
- b. (主張) 一花子が落第をした。
- c. (話し手の判断) 一花子が落第するのは可能性が最も少ない極端な場合である。

③成光秀(1978:182)―「영자까지 떠났다.(佳子まで立ち去った)」

- a. (前提) ①他の人が(信子…)がいる。
②ある人が立ち去った。
- b. (断言) 一立ち去った人は佳子が最後だ。
- c. (含意) ①他の人は佳子より後で立ち去っていない。
②佳子より後で立ち去った人はいない。
③他の人が立ち去った。

このように、前提と断言、前提と主張、断言と含意の重複などが見られる。

引用例文

・日本語

小説：夏の(湯本香樹実作、「夏の庭」1994、新潮文庫)、女が(松原惇子作、「女が家を買うとき」1990、文春文庫)

新潮 CD-ROM：女社(赤川次郎作、「女社長に乾杯！」1982)

新聞：朝日(朝日新聞)、読売(読売新聞)、天声(天声人語)

・韓国語

小説：玄海(韓雲史作、「阿魯雲一玄海灘は知っている―」1985)、自由(李清俊作、「自由の門」1989、나남)、女 1,2(金賢姫作、「이제 여자 이고 싫어요」上下1991、高麗院)、アリ(김주영作、「아리랑 난장」1998、中央日報連載小説)、結婚(朴婉緒作、「서있는 여자」1989、作家精神)

雑誌： lady(레이디 경향, 月刊)、 Win (週刊)

新聞： 朝鮮 (朝鮮日報)、京郷 (京郷日報)、東亜 (東亜日報)、 Han(한겨레新聞)

参考文献

- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論—名詞句の構造—』大修館書店
- 工藤 浩(1977)「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院
- 小林典子(1987)「序列副詞—「最初に」「特に」「おもに」を中心に—」『国語学』151
- 寺村秀夫(1981)「ムードの形式と意味(3)—取立て助詞について」『文藝言語研究 言語篇』6、筑波大学国語国文学会
- _____ (1986)「前提」「含意」と「影」『論集日本語研究(一) 現代編』明治書院
- _____ (1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 沼田善子(1986)「第2章 とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- _____ (1991)「とりたて詞文の二義性」『日本語日本文学』3、同志社女子大学
- 沼田善子・徐建敏(1995)「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』益岡隆志他編 くろしお出版
- 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 益岡隆志(1990)「取り立ての焦点」『日本語学』9-5、明治書院
- 宮地 裕(1952)「副助詞小放—主として準体助詞との関連に於いて—」『国語国文』21-8
- 高永根(1976)「特殊助詞の意味分析—가지, 마저, 조차を中心に—」『文法研究』3、文法研究会
- 高永根(1993)『韓國語의 總体叙述과 文法体系』일지사
- 高暢洙(1987)「後置詞 再考」『論文集』27 高麗大國語文學硏究會
- 金錫得(1992)『우리말 형태론 (韓國語形態論)』塔出版社
- 金勝坤(1989)『우리말 조사의 연구(韓國語の助詞の研究)』建国大出版部
- _____ (1992)『한국어 토씨와 씨끝 (韓國語の助詞と語尾)』서광 학술자료사
- _____ (1996)『현대 나라 말본 (現代韓國語文法)』도서출판 박이정
- 金英熙(1974)『韓國語 助詞類의 研究』『文法研究』1、文法硏究會
- 南基心・高永根 (1985)『標準 國語 文法論』塔出版社
- 徐正洙(1994)『國語文法』뿌리깊은 나무
- 成光秀(1978)『國語助詞에 관한 研究』高麗大學博士論文
- 申昌淳(1975)「國語助詞의 研究—그 分類를 中心으로—」『國語國文學』67、國語國文學會
- 任洪彬・李翊燮(1983)『國語文法論』學研社
- 李炳模(1995)『依存名詞의 形態論的 研究』學文社
- 李源根(1996)『우리말 도움토씨 연구 (韓國語의 補助詞の研究)』高麗大學博士論文
- 李熙昇(1949)『初等 國語 文法』박문出版社
- 趙愛淑(1997)「述語のとりたてについて—「だけ」と{man}、{ppwun}を中心に—」『筑波応用言語学 研究』4 筑波大学文芸・言語研究科応用言語学コース
- _____ (1998)「「だけ」の<とりたて>機能—語用論的読みの試み—」『漢陽日本学』6、漢陽日本学会
- 許 雄(1995)『20 세기 우리말의 형태론 (20世紀韓國語の形態論)』샘문화사
- 洪思煥(1983)『國語特殊助詞論—意味分析—』學文社
- _____ (1990)『現代韓國語の特殊助詞の研究—日本語の副助詞との対比を中心に—』慶北大学校出版部
- 蔡 琬(1977)「韓國 特殊助詞의 研究」『國語研究』39、國語硏究會
- _____ (1993)「特殊助詞 目錄의 再 檢討」『國語學』23、國語學會
- _____ (1995)「特殊助詞 研究의 한 反省」『朝鮮學報』154、朝鮮學會
- 최동주(1997)「現代國語의 特殊助詞에 대한 統辭的 考察」『國語學』30、國語學會
- 崔鉉培(1937)『우리말본』正音出版社 [復刊17版:1994]
- 최형용(1997)「形式名詞・補助詞・接尾辭의 相關關係」『國語研究』148、國語硏究會
- Yang, In-Seok.(1973) 'Semantics of Delimiters in Korean', LANGUAGE RESEARCH, 9-2, Seoul National Univ.